

令和元年度「全国学力・学習状況調査」

茨城町の状況について

茨城町教育委員会

1 調査の対象

小学校第6学年の全児童と中学校第3学年の全生徒を対象にして、平成31年4月18日(木)に実施されました。

2 調査の内容

- 教科に関する調査(国語、算数・数学、英語)
 - 今年度の調査より、知識及び技能、それらを活用する力を問う問題が一体化されました。
 - 中学校で新たに英語が実施されました。3年に1回の実施となり、次回は令和4年度の予定です。
- 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査
 - 児童生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査となります。

3 調査の結果と考察

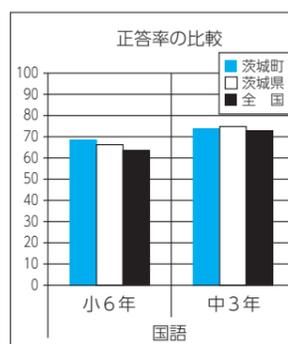
(1) 教科に関する調査

国語(小学校281人、中学校230人)

○ 小学校について

県平均、全国平均をともに上回る結果となりました。目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にして「書く能力」や、文章の内容を的確に押さえて「読む能力」を評価する問題の正答率が、非常に高い傾向が見られました。これは、自分の考えを明確にもって「学び合い」に臨み、互いに意見を交流させながら自分の考えを深める授業スタイルの定着や、読書活動の推進による成果であると考えられます。

その一方で、「漢字を正しく書く力」を評価する3問の問題のうち、2問は全国平均を大きく下回りました。昨年度も同じ傾向が見られており、課題が改善されていません。実際に出題された同音異義語の「カンシン→関心、感心」は、文脈を考えて適切に用いる力が求められます。今後も読書活動を積極的に推進して読解力の向上に努めるとともに、家庭学習と連携して漢字を正しく書く力の定着を図っていきたくと考えています。



○ 中学校について

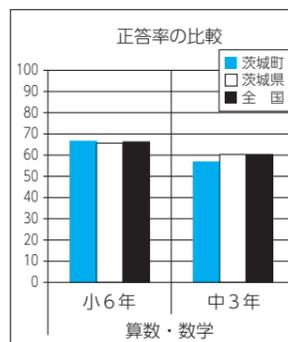
県平均は若干下回ったものの、全国平均を上回る結果となりました。小学校と同様に「書く能力」や「読む能力」を評価する問題の正答率が高い傾向が見られました。さらに、全ての問題において無解答率(解答欄に何も書かなかった生徒の割合)が低く、書くことに対する抵抗感を感じられませんでした。これは、与えられた文章を適切に読み取った上で自分の考えをもったり、伝えようとする事柄について根拠を明確にして書いたり話したりする学習活動を重点的に取り組んできた成果であると考えられます。

その一方で、「封筒の書き方」を評価する問題の正答率が県平均と全国平均を下回りました。宛先の住所と名前を書く位置に気を付ける、住所よりも名前をやや大きく書くといった「手紙の基本的な形式」を理解することは、社会生活に役立つ書写の能力を育むために必要だと考えます。年賀状やお礼状などを書いた経験のない生徒が増えてくると予想されるので、手紙やはがきの書き方の指導と併せて実際に手紙やはがきを書く学習活動を設定するなどの工夫をしたいと考えています。

算数・数学(小学校281人、中学校230人)

○ 小学校について

県平均、全国平均をともに上回る結果となりました。中でも、加法と乗法が混ざった式を正しく計算する、台形の特徴を理解する、グラフから資料の特徴や傾向を読み取るといった問題の正答率が非常に高かったことから、「基礎的・基本的な学力」が定着していると考えられます。しかし、問題に示された内容を解釈して説明する力を評価する問題の正答率が低かったことから、筋道立てて考えたり、その結果を適切に表現したりする際に必要となる「数学的な考え方」に課題が見られます。問題を解くための見通しを立てる活動や、根拠や理由を明確にして自分の考えを説明する活動を重視していきます。

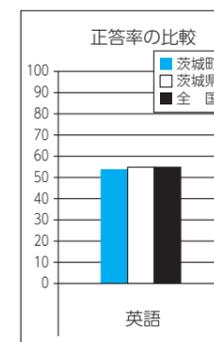


○ 中学校について

県平均、全国平均をともに下回る結果となりました。中でも、反比例の表からxとyの関係を表す式を求め、簡単な確率を求める、三角形の合同条件を書くといった「小学校でも学習した内容」に関する問題の正答率が低かったことから、基礎的・基本的な学習内容の定着を図る必要があります。さらに、今年度の結果から判断すると、昨年度の課題であった「図形領域」と「関数領域」に対する苦手意識も払拭されたとは言えません。「学び合い」の充実を通して、式や言葉など数学的な表現を適切に用いて証明したり、表やグラフと式を関連付けて説明したりする活動を重視していきます。

英語(中学校230人)

県平均、全国平均をともに下回る結果となりました。まとまりのある英語を聞いて情報を正確に「聞くこと」や、まとまりのある文章を読んで話の概要を理解する「読むこと」といった「受容的な技能」を評価する問題の正答率については、概ね満足できる結果でした。しかし、場面に応じて要点を捉えたり、話し手や書き手の意図を捉えたりすることには課題が見られました。また、与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして会話が成り立つように「書くこと」といった「発信的な技能」を評価する問題の正答率は全体的に低い傾向が見られました。そこで、基本的な文法事項の定着を図るとともに、長文を粘り強く読んで内容を理解する活動を重視していきます。「話すこと」については、相手と即興でやり取りしたり、相手の話を受けて質問したりする活動を重視していきます。



学習指導要領の改訂に関して

新しい学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱は、「何を知っているか、何ができるか」という【知識・技能】、「知っていること、できることをどう使うか」という【思考力・判断力・表現力等】、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という【学びに向かう力・人間性等】です。これらの資質・能力は、【主体的・対話的で深い学び】を通して育成されるもので、学びの深まりを生むカギが各教科における「見方・考え方」だと言われています。町では、「学び合い」と「ICT活用」を柱に今後も授業改善を進めるとともに、「小中連携」や「保幼小連携」の一層の推進を図っていきます。

新しい学習指導要領は、小学校が2020年度より、中学校が2021年度より全面実施となります。これに伴い、全教科で評価の観点【知識・技能】【思考・判断・表現】【主体的に学習に取り組む態度】の3つに統一されます。移行期間中の今年度は、小学校で3・4年生の外国語活動、5・6年生の外国語が先行実施されるとともに、各校で「プログラミング教育」も先行的に実施されました。また、中学校では「道徳」が教科化されました。次年度は、小学校で「プログラミング教育」が正式に始まる予定です。

教育の大きな変革にスムーズに対応することができるよう、町では様々な研修を行って教職員の資質向上に努めているところです。茨城町の教育のさらなる充実を目指し、今後も努力していきます。

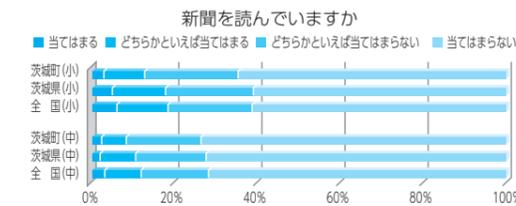
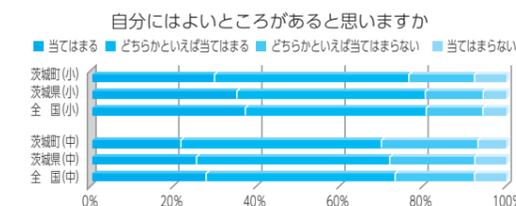
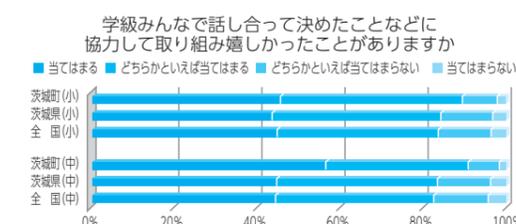
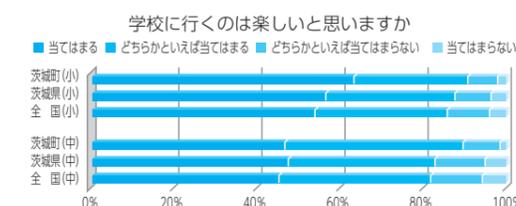
(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

全国平均を上回った主な質問項目

小中学生ともに、朝食の摂取や起床及び睡眠時刻など基本的な生活習慣の定着や、学校の規則を守ろうとする規範意識が高いことがわかりました。また、「学校に行くのが楽しい」と思っている児童生徒の割合は全国平均を大きく上回っていたことに加え、「学級みんなで話し合って決めたことなどに協力して取り組み、嬉しかったことがある」と回答した割合も非常に高いことから、学級のまとまりが基盤となって学校生活に対する満足感や充実感を味わえていることが感じられます。

さらに、「地域の行事に参加している」と回答した割合も非常に高く、住んでいる地域との積極的な関わりを通して愛着を感じていることがうかがえます。

また、もっとICTを活用したいと思っている児童生徒が多いこともわかりました。



全国平均を下回った主な質問項目

小中学生ともに、「自分にはよいところがある」という質問項目が全国平均を下回りました。自尊心は、自分を大切に思う気持ちと密接に関連しています。町の小中学校では、話し合ったり教え合ったりする「学び合い」の充実や、児童生徒を前面に出した行事の運営など、自己有用感を高める様々な取組を行っています。自分のよさに気付くとともに、他人のよさにも気付く子供たちを育てていきます。

また、全国平均と比較して1日あたりの読書時間が短いことや、新聞を読んでいる子供たちが少ないことがわかりました。